

大陸（南支）

鯨兵団兵器勤務隊

中南支の戦闘参加

香川県 中屋敷 博

私は大正十（一九二一）年六月九日、香川県綾部郡府中町で生まれました。昭和十六年徴集兵ですが、兵隊検査では第一乙種でした。本来は現役兵かと思ったのですが、昭和十六（一九四一）年十二月一日、教育召集令状が来て、善通寺の輜重兵第五十五連隊に入隊をしました。しかし、臨時召集ではなく教育召集であったためか、一カ月間の教育終了後、召集解除になったのです。

当時は非常時と言われ、世界の中で日本が孤立していることは、我々の心に刻まれており、中国大陸での支那事変は長く続き、仏印進駐や経済封鎖などと新聞報道がなされていました。

私が入隊し、教育が始まった昭和十六年十二月八日、案の定、大東亜戦争が始まりました。兵営内でも、上官以下緊張した日々であることを、教育、訓練の中でひしひしと感じていました。従って、我々はそのまま軍隊生活を続けるのであらうと覚悟をしていました。ところが一カ月間の教育が終わると、召集解除となり、帰宅することになりました。

その間、ハワイ空襲、マレー進撃、南方各地の占領と、百戦百勝の大本営発表に心を躍動させ、街々も戦勝気分で沸いていました。国内はまさに戦時色に塗り

変えられており、私は一時帰宅し、就職していた三菱重工のある神戸へ戻りました。会社の上司、同僚は「ずいぶん早く帰れたなあ」と驚いたり喜んでくれてきました。しかし、私は内心、近いうちに再召集があるだろうと予期していました。

昭和十七年七月十五日、今度は臨時召集令が来た。家からの知らせで、いよいよ来たかと覚悟を決め帰宅しました。召集場所は善通寺の輜重連隊ではなく、郷里の連隊、西部第八十二部隊であり、そこは丸亀歩兵第十二連隊の留守隊でした。

続いて、第四十師団（鯨兵团）へ転属となり、中支の師団司令部兵器勤務隊付を命ぜられました。なぜ、輜重兵でもなく歩兵でもなく、兵器勤務隊とは何をやる所なのだろうかと不審に思いつつ、急遽、七月二十日、坂出港出帆となったのです。

輸送船は四千〜五千トンの民間の船でした。我々は船倉に入れられましたが、そこは、さながら農家の蚕棚のように仕切られていました。蚕棚と言っても、今

の都会の人には分からないでしょうが、船倉を何段かに仕切り、そこに寝室というより、ごろ寝が出来る居住区を作っているのです。体を伸ばすことも出来ず、歩くには、頭を下げ腰を曲げなければ天井にぶつかります。畳一枚の広さに四、五人詰め、足を伸ばして寝ることも出来ぬような、狭い所に押し込められました。防護上の問題もあるためか、甲板へは出ることも出来ませんでした。

それでも、勝っている時ですから、対空、対潜水艦監視はしていましたが、それほどやかましく神経をつかっていなかったようです。しかし、東シナ海の波は、乗船者である我々にとっては、酔いをする者も続出するという、これまであまり体験をしなかった苦しみでありました。同じ召集兵同士ですから、その間に同県人で顔見知る者もできました。「戦友」という軍歌にある「玄海灘で手を握り……」といった人間関係ができた人もいたようでした。

上海港へ上陸し、二、三日、兵站におりましたが、

次は揚子江を上流へと溯航し、八月八日、武昌へ上陸しました。この武昌は中国でも大変暑い所と言われていいます。夏の暑い時は屋根に止まった雀が焼け落ちるとさえ言われた所です。我々がこの武昌に着いたのは、最も暑いと言われた八月八日でしたから、その暑さには驚かされました。

教育召集を受けた兵ばかりが指揮官に引率され、第四十師団司令部所在地の咸寧に着いたのは、たしか八月十二日だったと記憶しています。早速、兵器勤務隊へ同年兵六十人あまりで申告しました。勤務隊は師団司令部（鯨第六八八〇部隊）に属するもので、兵技兵や自動車の運転手等々、皆技術者ばかりの選り抜きでした。私は、神戸の三菱重工造船所で旋盤工という工作機械工をしていた関係で、兵器勤務隊に編入されたのかもしれない。

鯨部隊は、湖北省東南部地区で警備、討伐、作戦をしていた部隊でした。湖北省には、蒋介石軍ばかりでなく共産新四軍もあり、我々は本科の歩兵と一緒に警備討伐に参加しました。本科では戦死・戦傷もずいぶ

ん出しましたが、我々兵器勤務隊からも犠牲者は出ており、私も度々戦闘に参加し、弾丸の下を潜る体験をしました。

昭和十八年八月二日から江北殲滅作戦に参加、二月十六日に、師団は監利という所を占領し、騎兵隊が敵の師団長を捕虜にしたと聞きました。三月には作戦を終了し原駐地に帰りました。

続いて、四月から江南殲滅作戦にも参加することになるのですが、この作戦は五月末まで続きました。私が、正式に兵器勤務班付となったのは七月一日で、昭和十九年四月二十八日まで勤務しました。

昭和十九年四月二十九日から八月八日まで、中国大陸で最大の作戦といえる第一期湘桂作戦に参加しました。岳州では在支米空軍の双胴のP38という大型戦闘機（南方で山本元帥機を撃墜した機種）から低空で銃爆撃を受けました。我々は師団司令部付であるため、師団司令部と一緒に行動していたので、各隊に囲まれて作戦をするのです。

中支派遣の作戦軍である第十一軍は十個師団で戦闘をしていました。衡陽城攻略は大苦戦で時間がかかり、六月頃から八月上旬までかかったのです。その間、衡陽の北西の方で戦っていましたので、衡陽攻略には直接参加していませんでした。

衡陽攻略が終わったので、日本軍は南方へと進みましました。この大作戦は在支米空軍基地を占領することが大きな目的でしたから、その大飛行基地のある広西省桂林攻撃を命じられていて、中支軍も南支軍も桂林・柳州を直指して作戦をしていました。我々が、駐屯地の威寧を出発する時はラシャ製の冬服でしたが、空襲を受けながら南下するうちに衡陽では夏、そして桂林攻略戦の時は秋になっていました。

桂林は中国軍にとっても在支米空軍にとっても大変重要な基地ですから、その防衛も大変強固なものでした。桂林の周囲を流れている漓江の河端には地雷がたくさん埋められ、その被害も多く、夜、あちこちから地雷の爆発音が聞こえてきました。我が第四十師団は攻略線の中堅部隊でずいぶん苦戦をしたのです。

桂林・柳州という所は石灰岩の岩山が筍のように立ち並び、それは皆トーチカというか、要塞陣地になっていて、相手からは攻撃する日本軍は見えるが、我が軍は敵がどこにいるか、どこに砲や機関銃陣地があるか分からなかったのです。そのため歩兵隊がなかなか寄りつけず、本来は後方で掩護する山砲兵が、最前線に出て直接照準をして撃つ戦法になったのです。

我々は、中国の小舟の上にアンペラを掛けて漓江を渡河するのですが、兩岸から河幅の狭い所で撃たれ、さらに曲がり角で撃たれるから被害は大きくなります。こちらが強行上陸すると敵は逃げてしまい、江やクリークの岸は泥土が多く、足が靴の中でふくれてしまい歩くのに苦労しました。

このようにして、桂林を第十一軍の我々が完全占領したのは、昭和十九年十一月の十日頃と言われています。難攻不落と言われた桂林攻略戦は、我々鯨兵団（第四十師団）が主力となって戦い奪ったのですが、熊本編成の広兵団も強力でした。一方柳州も、我が第十一軍の主力と南支の第二十三軍が、桂林攻略とほと

んど同日に占領したということです。

桂林攻略を終えた我々の師団は、今度は反転して南部粵漢線打通作戦の命令を受けて南支に向かって南下しました。一方、中支軍主力はさらに西方に向け貴州省攻略に向かったと後に聞きました。

南支に向かった我々は、粵漢線の鉄道資材を取り、運んだりしたのです。私は、これら南支での作戦（三南作戦）で、初めから終わりまで師団司令部付で、司令部内の警備もしていました。

兵器勤務隊という名称ではありませんが、総数百人くらいで軽機関銃程度の装備で師団司令部を守っていました。長は少尉候補生第十五期の今井兵技大尉であり、本科の大尉ではありませんでした。

三南作戦で広東に入ったのですが、中支の岳州から「着のみのままの、着たきり雀」で、体は「しらみ」だらけ、靴はとくに駄目になり、中国の靴や地下足袋を履きましたが、足がふくれて、一度脱いだら後は履けませんでした。とても日本軍には見えないくらいに服装でしたが広東でようやく、被服、靴などの支給

を受け、やっと日本軍人らしい姿になることが出来ました。

三南作戦が終了し、南支軍は、連合軍上陸に備えて要所に防衛陣地を築いていたのですが、我々中支軍は中支集結を命ぜられ、我が師団は広東を後にして北上をしました。しかし、江西省の南昌の手前で終戦の勅語を聞き、残念さと不安のうちに小銃の菊の紋章をやすりで削り落とすのに苦労しました。

さらに集結を命ぜられ、部隊は北上、揚子江畔に到着し、南京で武装解除となったのですが、おめおめ兵器を敵の手に渡すに忍びないという我々の本心というか、あるいは上官の命令であったのか、兵器、弾薬を揚子江に捨てました。

それからは、抑留というか、集中営生活というか、武器なき日本軍は南京で道路仕事や、飛行場整備、軍公路の建設整備などの中国軍命令により使役に従事しました。しかし、中国人は我々に対し良い態度で接してくれる人が多く、屈辱感というより親しみと感謝の

念を持って接することが出来ました。蔣総統の「暴に報ゆるに和を以って接する」という意向が、中国軍人や住民に了解されていたからでしょう。

南京城内の兵舎で抑留生活を終え、昭和二十一年五月十七日、米軍の上陸用船LSTにて上海出帆、二十三日博多上陸、二十四日帰宅することが出来ました。

高松市街は空襲により大きな被害を受けていましたが、私の家は大丈夫でした。家に帰り着き、私は八男であり、父や兄達と一緒に暮らしていましたが結婚後自立し、男児二人に恵まれ、幸せな生活をする事が出来ました。

駐蒙軍騎兵第四旅団

河南作戦、戦後の対共戦闘

岐阜県 山平 春重

大正十二（一九二三）年十一月一日、岐阜県益田郡

朝日村で兄弟妹八人の長男として生まれ、家は農業、家族一同健康でした。徴兵検査は昭和十八（一九四三）年六月、甲種合格で、農家の長男であり弟妹も多いので責任ある地位でした。

昭和十八年というと、戦争も連合軍に押されかけている時でしたから、男子の当然の義務として現役兵として戦地に行くことは覚悟を決めており、父母をはじめ家族も「家のことは心配するな」と言ってくれていました。

昭和十八年十一月一日、北支那方面軍騎兵第四旅団へ入隊、集合したのは大阪府の部隊で臨時に二日ほど入隊し、冬服が支給されたから多分寒い所だろうと予想しながら大阪港出帆、博多から朝鮮釜山へ上陸し、鉄道で山海関經由北支へ向かいました。しかし、やはり戦地だと感じたのは夜中、輸送の列車に対して射撃を受けたことでした。これは共産八路軍であると引率の下士官から言われました。我々は騎兵銃を持っていましたが、応戦することなく列車は走り続け、被害も無かったようでした。